

最終問題

余は平安を得る途^{みち}を知れり、然れども途を知るは必しも途に入るにあらず、基督に於ける信仰は余を罪より救ふものなり、然れども信仰も亦神の賜物なり（以弗所二章八節）、余は信じて救はるゝのみならず亦信ぜしめられて救はるゝもの也、此に於てか余は全く余を救ふの力なきものなるを悟れり、然れば余は何をなさんか、余は余の信仰をも神より求むるのみ、基督信徒は絶間なく祈るべきなり、然り彼の生命は祈禱なり、彼尙ほ不完全なれば祈るべきなり、彼尙ほ信足らざれば祈るべきなり、彼能く祈り能はざれば祈るべきなり、恵まるゝも祈るべし呪はるゝも祈るべし、天の高きに上げらるゝも、陰府の低きに下げらるゝも我は祈らむ、力なき我、わが能ふこととは祈ることのみ。

“ But what am I ?

An infant crying in the night :

An infant crying for the light :

And no lan guag e but a cry.”

然らば我は何なるか、

夜暗くして泣く赤兒、

光ほしさに泣く赤兒、

泣くよりほかに言語なし。

私は平安を得る道を知っている。しかし、道を知ることが必ずしもその道に入ることではない。キリストにおける信仰は私を罪から救うものである。しかし、その信仰もまた神からの賜物である。私は信じて救われるだけでなく、信じさせられて救われるのである。この点で、私は自分を救う力が全くない者であることを悟った。そうであるならば、私は何をすべきであろうか。私は自分の信仰さえも神から求めるほかない。キリストを信じる者は絶え間なく祈るべきである。そう、信者の命そのものが祈りなのだ。信者は、なお不完全であるからこそ祈るべきである。なお信仰が足りないからこそ祈るべきである。うまく祈ることができなくても祈るべきである。恵まれても祈るべきであり、呪われても祈るべきである。天の高い所に上げられるときも、地獄の低い所に下げられるときも、私は祈ろう。力のない私に、できることは祈ることだけである。

しかし、私は何者か、

夜の闇の中で泣く幼子、

光を求めて泣く幼子、

ただ叫び泣くほかに言葉を持たない。